



狂歌詩別記

利  
3010  
3



御書  
 御書  
 御書

○遠眼境の手かや龍官の波の花婿

己のその夏見つづきて諸國よにあまき  
 高麗の熱官のまねをあるはこれとて  
 君を今の風よありしをいふまゝのためとして  
 屋敷に命をさす面背のを眼法と  
 いふおのこれゆえに毎日天を工のうら  
 多とてうちひあをひで焼芋とて一日に  
 あまきうらにまゐる上た人のおのりまを  
 妙なるが縁を宮城の二のなるにあらう  
 身出て出らんあをいふのかれのまにを  
 どのおれが日本大江戸の目本橋苑園亭といふ  
 酒をのみるが井成といふ男その次に中  
 を男三人おれの米守万もといふ人猪牙に  
 のつていふてんまといふ人まといを同一

其のまじきことか 目まじき 目まじきことか あまじき 目まじきことか あまじき 目まじきことか  
 おれたらうみのまじき評判に書きおのの精進  
 とらふであらうりまじきこととてくあまじき  
せんら 泉及の堀いよの内へみる狂言子であらうと  
 りしくおひめをならぬおそむせよの思ふたうて  
 ありまじきことか ひめ 娘君のまじきおひてやんによ男  
 やあまのたれであらうとのめあれた大坂の役  
 者 しや 浅尾なにとややりのことか まじき 娘君これに  
 みとれおひ いち 平のうまろのまじき まじき 娘君これに  
 のまじきことか まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 肉 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 上 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 下 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 此 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 いろ まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに

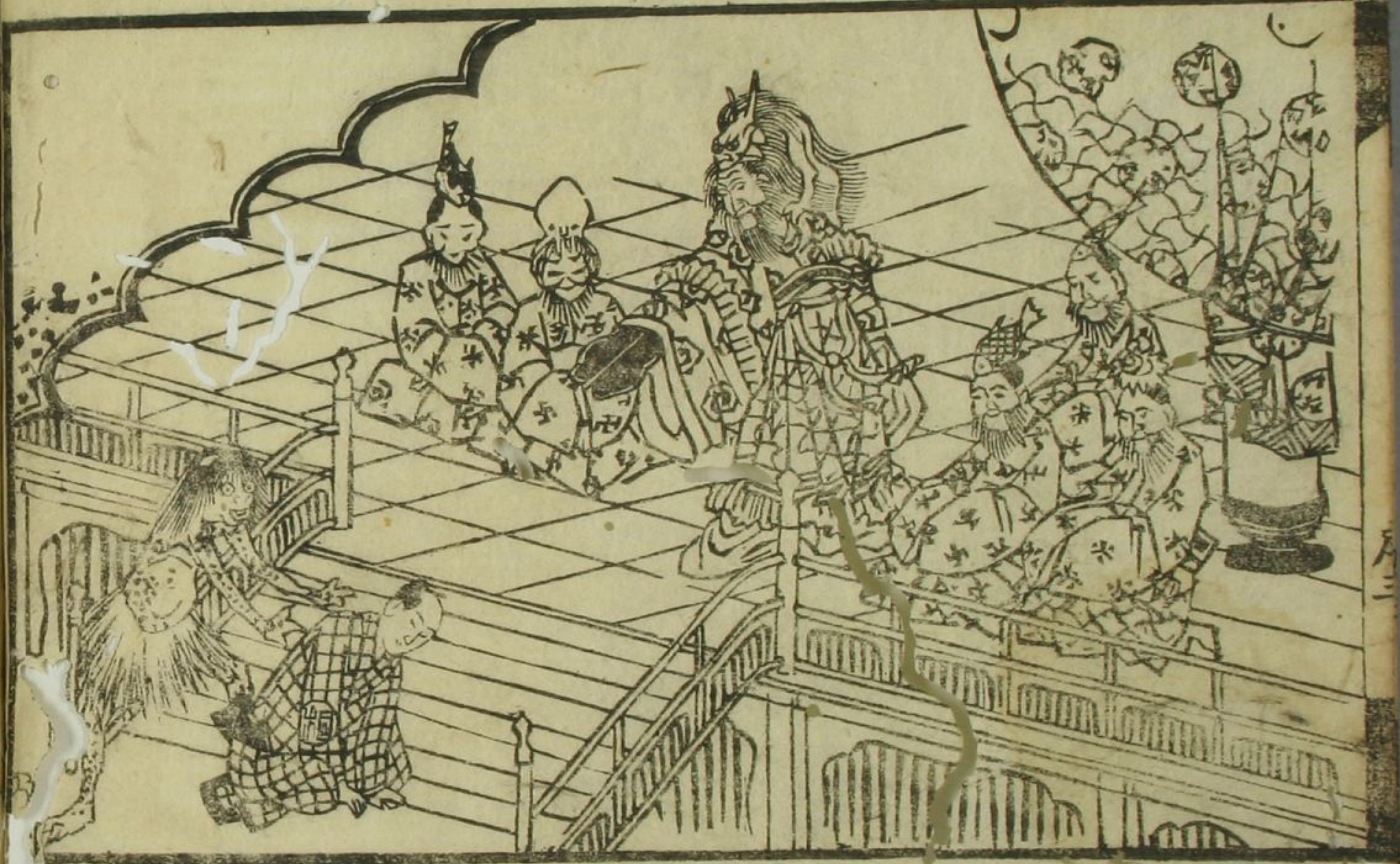
二 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 三 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 四 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 五 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 六 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 七 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 八 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 九 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十一 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十二 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十三 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十四 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十五 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十六 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十七 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十八 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 十九 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに  
 二十 まじき 娘君これに まじき 娘君これに まじき 娘君これに

つれてかづりをするあぢのつて結宮をさ  
 ぎ多程多く読みにいそて階下はづつせられたり  
 兼つて<sup>た</sup>またのけてつれまゝをさつちわひ  
 汝がまゝかゝるまゝをさつちわひつて<sup>や</sup>結宮  
 やとの位せえたりいそて<sup>た</sup>三の位にいでしり  
 ひと<sup>た</sup>たをさつちわひつて<sup>た</sup>市せまをさつちわひ  
 げんのかむせのせがへいのみまゝに  
 のい<sup>た</sup>たせがへいのみまゝに<sup>た</sup>あつちわひ  
 たまげ姫が園あつちわひのせがへいのみまゝに  
 ぬてあつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ひはと<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 らんぢやの<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 つい<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 がうづげあつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて

あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 のた<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ついで<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 姫君のお<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて  
 ち<sup>た</sup>あつちわひつて<sup>た</sup>あつちわひつて



亭四



中あつ手母うとらきたあつてかしてあやふら  
かれは<sup>うた</sup>侍ひ日年(ゆ)まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
昔方も<sup>そのまう</sup>あまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
おもひれがあつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
まへし<sup>うた</sup>のあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
まへし<sup>うた</sup>のあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
まへし<sup>うた</sup>のあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
まへし<sup>うた</sup>のあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
まへし<sup>うた</sup>のあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
まへし<sup>うた</sup>のあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
まへし<sup>うた</sup>のあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし

あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし  
あつてあまをまへし<sup>うた</sup>まはるむ<sup>うた</sup>主のあまをまへし

てお連まのゆゑかつてもんあつたれどあまの  
あつてすうろろるすす評判のそとまらく

文政五年

會主

午丸

塵外樓清澄

青陽

ちよとほのたまを

文政三庚辰年八月三日

釋淨誓信士

俗名

六光園秀丸

文政四年巳年十月廿日

一空道喜居士

俗名

狂蝶子文丸

寺ハ下谷泰窓寺

右徳田向奉り寄也

宿屋飯盛或爲判  
狂歌仙寺目錄

▲惣巻七頭

極上上吉

水莖跡成

江戸

▲春之部

大上上吉

春の屋成文

口

大上上吉

訪館歌あ美

キ

切上上吉

年々春稻葉

夕

至上上吉

竹房白酒

口

上上吉

銀花楼志津枝

口

上上吉

梅花園玉念

キ

上上吉

柏樹園仲垣

サカヒ

上上吉

法昌菴谷住

江戸

上上吉

六翁園益久

口

上上吉

萬徳成

口

上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉
梅下鼻差	明月亭風竹	養老亭滋成	鄢歌馬躬	柯廼屋亮教奇	紀板之	唐樹園南院羅	月九	柳彈林千條	奧子逸水	木樵山人	流文穴林	東山人	百曲園神卷
仁	七	ア	ナ	江	古	ヌ	セ	仙	ナ	後	足	江	キ

上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉	上上吉
菊九	花亭待	六紀園名卷	五葉舍子抄	楊樹園近尾	及樹園苗繼	百花魁樹名	金成樹	溪流窟元清	二見岩景	秀番園名人	六石園飯打	吳竹松小葉	昔琴成
江	ア	ナ	ナ	江	ナ	江	口	キ	上	ナ	楠	江	口



上上士

綠酒園成菅庄

瓢 駒 雄河列

泉 律 園江芦

砂 原 淺 菽ツマ

甲 住イモ

蘭 亭 花 云 住イモ

箕 居 園 夫 成越後

一 節 園 竹 丸クハ

六 秀 樓 三 丸ナマ

蘭 凌 亭松代

麗 橋 亭 系 居下北

立 足 亦 長 弓クハ

木 屢 系 松江芦

管 笠 持 丸口

奧 亭 稻 丸ナマ

上上士

上上士

上上士

維 羅 房 寬 基 持 人

修 雅 園 梅 佳

誰 法 師

上上 千里園駒丸 上上 千寿栢百務

上上 出方亭亥加世 上上 春眠亭保藤父

上上 若水亭栢備 上上 平木園夢伶

上上 一窓亭万丸 上上 栢樹園廣及

上上 鞠車堂人 上上 陶香亭若比良

上上 文 杏 園 上上 花 野 岡

上上 平海園彩麻 上上 谷川鳴香

上上 青曼亭系成 上上 光亭代成

上上 長松園清女 上上 梅 忍 人

上上 長生齋春明 上上 狂 歌 菴

上上 河上 依丸 上上 酒上懷別

上上 宍 住 上上 盈庫寺市丸

上上新 紗岡 上上 蘭溪亭了泉

上上 上 龜舍豆菜 上上 涼風亭志吉

上上 松 茗 丸 上上 飯 山 盛

一上上 筑 根一上上 紀 炭杉  
 一上上 釈堂九紀一上上 霍岡高竹  
 一上 加麻菴杉成一上 松風亭桐安  
 一上 玉樹岡加滿圭一上 翠燕亭了菊人  
 一上 燕亭其美

功上吉 六々園 八

▲夏之部

真上吉 船の屋細人 江戸  
 功上上吉 梯の屋春樹 大坂  
 功上上吉 春の屋不美 口  
 至上上吉 龍の屋弘番 大坂  
 上上吉 秋山人 江戸  
 上上吉 美翰名三景金 十六  
 上上吉 千曲楼芳住 信州

上上吉 壺錫唐益 三ノ  
 上上吉 射柳園軒風 江戸  
 上上吉 牛千教子 越後  
 上上吉 菊兒堂表天丸 久ノ  
 上上吉 二本法師 オク  
 上上吉 松風亭藤祐 江戸  
 上上吉 蝶々亭仲住 松井田  
 上上吉 加茂葵 南紀  
 上上吉 あゝ甘糸小 江戸  
 上上吉 月花夕時 アハ  
 上上吉 丸丹圓藤康 大胡  
 上上吉 浅田 居 川又  
 上上吉 出立鯉屋人 江戸  
 上上吉 竹友軒中吉 廿多  
 上上吉 杜の屋仲貫 江戸

櫻東園云云

松本

- 一上上 依 小鞠 一上上 止々堂大子
- 一上上 花垣多住 一上上 実徳亭孝南子
- 一上上 六柯園猿人 一上上 秋林堂酒丸
- 一上上 隈川細代末 一上上 三思堂無園
- 一上上 積々園行行 一上上 六書園純孝
- 一上上 古言亭琴蔵 一上上
- 一上上 南山降尚房

▲秋之部

- 全上吉 浅来園安良 力多
- 上上吉 松千本 上吉
- 上上吉 和氣五武 力多
- 上上吉 鳳鳴園鳳鳴 見光
- 上上吉 言葉玉毎小 山形
- 上上吉 紙々直了 江戸

- 上上吉 歌笑亭重行 江戸
- 上上吉 千踏堂栄 七身
- 上上吉 梅の屋鶴子 江戸
- 上上吉 千名菴真砂 下野
- 上上吉 松樹園存人 江戸
- 上上吉 将場早房 十六
- 上上吉 端午園千卷 富平
- 上上吉 董後梯只丸 江戸
- 上上吉 丁々亭栲時 口
- 上上吉 規矩の屋千々巻 松代
- 上上吉 紀長雄 久手
- 上上吉 柳髪亭唐倫 仙下
- 上上吉 八木亭満ち 江戸
- 上上吉 数寄可殿醉一 尺中
- 上上吉 松林亭増安 内津

上上吉 虫喰文字成 字

上上吉 一多客文字丸 冬

上上吉 五足赤毛也 口

上上吉 長藏坊神風 上田

上上吉 化鉄有刀子 其口

上上吉 梯島堂玉成 上子

上上吉 梯琴堂彈 口

上上吉 芦の屋遊雁 大坂

上上吉 橋 普黒 口山

上上吉 和歌娘木立 口

上上吉 六帖園 亭

上上吉 本名岩徳 アハ

上上吉 紀賤丸 アチ

上上吉 井蛙亭也 字

上上吉 撰本赤月 冬

上上吉 松元堂後鏡 口

上上吉 坐の屋夕管 尾州

上上吉 柳義亭白奥 冬

上上 六階園盛 上上 栗 冬

上上 松風舎茶名 上上 若草亭茶好

上上 徐亭吟海 上上 珍齡舎園列

上上 柳階後守 上上 好文居未堅

上上 積花亭氏里 上上 松樹影高岳

上上 醉丹坊 上上 松樹影公輔

上上 大台繁人 上上 大台席溪

上上 春日右里 上上 笹の屋百世

上上 東湯堂國住 上上 桑之好草新

上上 時貨通翁 上上 桑之好草新

上上 宿月下也

上上 友一上 友泥返風

上上吉 玉鐸乃淋 字

冬之那

至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 千金香春芳 河  
 上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 竹林堂友住 キ  
 上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 望嶺居氣枝 河  
 上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 柏樹園之入 河  
 上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 五逢園舟丸 ク  
 上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 南桂子枝成 河  
 上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 杉樹園志成 河  
 上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 六解園心兼 ト

上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 成風亭春及 原市  
 玉柳園枝枝 河  
 山家赤下春 高

一上<sup>上</sup> 水鏡亭初兼 一上上 法草菴善松  
 一上<sup>上</sup> 車堂陶虎 一上上 有茄子本也  
 一上<sup>上</sup> 得々亭春丸 一上上 大松亭三又  
 一上<sup>上</sup> 松の宿春砂 一上上 南山奇寿

一上<sup>上</sup> 千哉園菊盛 一上上 魚目出成  
 一上<sup>上</sup> 世界坊一吞 一上上  
 一上<sup>上</sup> 志乃堂横則 一上上 世の香皇天  
 一上<sup>上</sup> 原田 聖栖 一上上 事足菴の丸  
 一上<sup>上</sup> 如露園弥集 一上上 月如津  
 一上<sup>上</sup> 春山亭契表

▲ 忘々部

至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 福の屋内成 河  
 至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 渺々亭強氣 河  
 至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 苑園亭麟 河  
 至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 大江丁里 六  
 至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 緑樹園元玄 河  
 至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 花咲菴米 河  
 至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 初公亭早丸 河  
 至<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 辰あつ丸 河  
 上<sup>上</sup>上<sup>吉</sup> 枚成数雄 河

上上吉	錦次堂百羽	カ
上上吉	江都園	カ
上上吉	狩場早房	カ
上上吉	陶々亭信三	カ
上上吉	月の玉丸雄	カ
上上吉	江戸花成	カ
上上吉	新樹園深三	カ
上上吉	花の田雅永雄	カ
上上吉	桃三千寿	カ
上上吉	十帖園巻三	カ
上上吉	泉月菴雨眺	カ
上上吉	錦糸亭綾機	カ
上上吉	宗希子	カ
上上吉	松見香	カ
上上吉	平安堂七辻	カ
上上吉	幸春入道	カ
上上吉	月の香巻後	カ

上上吉 原田福垣 カ  
 上上吉 柳枝園七樹 カ

上上吉 三日別考三 カ  
 上上吉 人万年 カ

上上吉 吳竹春音清 カ  
 上上吉 樹樹園片九 カ

上上吉 後小路近尾 カ  
 上上吉 蘇宛住 カ

上上吉 左大尽 カ  
 上上吉 妙麻起兼一上上 カ

上上吉 六種岡笑叙一上上 カ  
 上上吉 六槐岡見兼一上上 カ

上上吉 馭路仲系 カ  
 上上吉 偏流亭甘泉一上 カ

▲雜之部

六上上吉 至清堂捨負 カ

至上上吉 全亭正直 カ

上上吉 春樹千霞 カ

大上上吉

六歌園文教 三ノマ

大上上吉

素羅園天馬 芦

至上上吉

司馬園成影 口

至上上吉

蘭薰亭長伝 松

至上上吉

紀 曹豆 市

上上吉

千枝松房 甘カヒ

上上吉

南亭月住 市

上上吉

岳亭春伝 口

上上吉

酒 烟 主 甘カヒ

上上吉

古家雨也 市

上上吉

壺等栲風後 川

上上吉

千柳亭唐丸 オク

上上吉

宝市亭外成 芦

上上吉

只六竹多口 上毛

上上吉

花月房春秋 上毛

上上吉

露仙亭桃人 芦

上上吉

芙蓉亭了英 上毛

上上吉

六枝園連樹 山

上上吉

三柱亭一滴 アノ

上上吉

玄公洞合口鉄丸 甘カヒ

上上吉

一曲亭水准 アハ

上上吉

弓の玉羽雀 口

上上吉

丸老峯玄雀 山

上上吉

橋 五 園 市

上上吉

白髮羊丈 芦

上上吉

青白菴赤住 口

上上吉

桃太郎有時 市

上上吉

繁の玉竹成 上毛

上上吉

壺川多成 三

上上吉

糸 長 樹 山

上上吉

多情亭奏斗丸 芦

上上吉

金の玉五角 口

上上吉

臨江亭里確 口

柳葉堂舟子 子

上上吉

六喻園各類 子

柿樹園 子

上上吉

老杏軒三三傳 子  
甘棠舎安丸 子  
鳳翔栲杻女 子  
氣酒園右糸 子

一上上 花山人香折 一上上 雙舟抄 子

一上上 甲六好商人 一上上 無示赤後板 子

一上上 海原由周 一上上 檜柏子舟丸 子

一上上 豊善堂果丸 一上上 龜甲 成

一上上 石の玉西丸 一上上 百花園唯住 子

一上上 波の上舟丸 一上上 芦 翠 子

至上上吉 橋樹園早油 子

至上上吉 白毛舎万巻 子

惣巻軸

極上上吉 泥田坊太記 子

惣巻頭

極上上吉

水釜跡成

〔茶類〕つづくこと一文字にゆききて  
鬼のあつちくちくちくの末

〔所見〕昔蒼頡讀書を伝ふる天粟をよび思ひて哭

とて南子に及ぶより四角を各々をわびてひく

る多かぐそら起清木の神速も感ずると云ふの如

〔所見〕鬼と女とにいていふと伊勢物語の五十八段

又兼盛のまにらつてより〔所見〕け度とせのそら

ぐとてそらとては松葉法をみてまろくお夜

とらひ文字もまろくこといふやうに二巻のお獄うぶ

おにらひの町の町〔所見〕一首の甲に花情とせの

しともひまひのめいさういふにひまひさうく

ひまひ三つものうらそらまじこといふまきがつくぬその



あつたはらうらなふの舞の身かへる  
ぞい<sup>四</sup>あつたはらうらなふの舞の身かへる  
牛<sup>五</sup>あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる

▲春之部

大上吉

春の屋成丈

「あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる」  
梅とそらうらなふの舞の身かへる

あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる

あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる

大上吉

詩部歌あ美

「あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる」  
二十九ちやりの花の枝

あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる  
あつたはらうらなふの舞の身かへる

正徳の...  
...  
...  
...  
...

切上吉 年々松栢葉

「妻のぬれと...」  
...

此の向の秀めと...  
...

...  
...

至上吉 竹房白濁

「第一と宗...」  
...

...  
...

至上吉 銀花樓雲津枝

「羊札のおらそ...」  
...

...  
...

体あきふらふらかゝる〔白〕は〔白〕のしやうれ  
すねたぐひは年れえあぢとぞ

上相生

上上吉

梅の園玉倉

〔下〕〔下〕あもるくまを捨くはまの  
ちりりりあまのむこり

〔陰〕紫塵つらね入るをよぶるころ〔陽〕神孫と申せよ  
みまぐらひ障子の出まぢくお水うらぬのふゆ  
とりびを折よひまをきく〔因〕たゞきさるる塵  
とかけられぬ骨折るべしとれし

泉城

上上吉

柏樹園仲垣

〔は〕〔は〕てもうきく秘入りみりしふ  
留のりてうもあぢとるるこめ

〔陰〕春あのはぐやまの体相信ぶとぞとてあぢ  
眠らる〔白〕き書籍に銀杏のをしつとて松曲の  
いさうとけ佐家のまきたる〔白〕の佐着の夜あぢ

〔平〕あはし

上上吉

汰昌春谷住

〔玄〕年よりと梅の子はもと釣めて  
むまきまちりりんまぢく白雨

〔陰〕白濁く相まぢく〔白〕のひとあぢとての  
まっふの句とまぢりく取らるるひのひ  
らやのあぢとらるるまぢく〔白〕のまぢく

上上吉

六扇園益久

〔美〕装のまふ袖の落もつまらりと  
くりてまもよす人そめてこま

〔陰〕と浮つがぢのにはまぢく〔白〕の路はま  
あて手竹の門松とらるる〔白〕の事の大まきまぢく  
えまよくひまぢく〔白〕のまぢく

上上吉

萬徳成



三十一

「雪の裏の幕にさかまれば  
東夷・南蠻 春よさうさや

〔跋〕一座をんちを町とてなすそのいさ枝  
小霜月ついたちを〔同〕ころく老づくのつねを  
評判をたのむく〔跋〕をんちを常あて吉例のち  
まづく切幕を老づく東南をみるにたつり  
たやとのつねらつるのうらさろ松本宅の  
むいさのほい本場のちんたく後ておやせうしや  
くしやんく

ナニ

### 上上吉 楳下貞彦

「らうそなとまめいふりさ花の枝  
くさ荷ハくろきあぬのう」

〔跋〕狂言春の山花の家づとに奴の肉をかくを  
たぐるもふは春あまおのつとがねよたしくて  
ままぎりの宮づつめつね花の出づのうま  
ころが如一大いやく

### 上上吉 叶草風竹

「西風のそん〜のそひかきん  
こころさ〜こころの紙ふ

〔跋〕一首の趣意なふとにたふるさぬをいん  
のほどわたりろくうけたまりの二通とまづあ状  
巻入られてたまのそいめいしん

### 上上吉 養老亭流成

「ほろくうりき〜のそひかきん  
そろとま〜さうか〜のそと

〔跋〕かゝるのそとにまらう春のうまきとらで  
らうふまきまのやろくとまのままて山後の  
ちちのそとにまらう山後のまをそとん  
つたのそとにまらうかゝるのそとまきま〜

ナニ

### 上上吉 鄙歌馬形

「おえと膝をうし甲と引く  
毛の鬼のくみとかくつ

既下とれうにて風とゆげの玉をうし  
ととく鬼毛のかしらをわく我家凱陣せ  
るくよげなのる名のきとごらるぞ

### 上上吉 柯廻屋元救哥

「浦老う指根のやれハまの徳  
沖の帆ともに皺のよるまゆ

既鎌倉大馬実勢ゆつと老き年とら侍具の  
海とてに沖の小侍あめめ沖の帆とも  
皺のよるまゆとつねたなつとめとる

### 上上吉 紀後え

「此のころ鯛も梅の名とよみて  
サツウノ風といふとつううれ

既漢師の王也釣舟のろとたての松坂の  
うのさつたひといふるおらつとつと備多つ

磯のそををさつるさつさつる風といふとつと青  
海岸のるさつとつと珍き

### 上上吉 唐樹園南陀羅

「花吹雪とよふとつとつとつとつと  
口上とよふ由白し梅と香

既源三宿頼改めてあびますより馬小鞍かけ  
といひての世はまはしと使者の夜討に若  
今とつとつとつとつとつと口上のからさきをほめ  
らつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

### 上上吉 月 丸

「笑梅の白ひを撿てりアハ  
集あき里に侍やあくる

既本名侍勢のほるれどもかつは積の女とつと  
のるかつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
中さつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと



いんかーん

上上士回

東山人

山寺の香炉も花小名のまて  
様もさくといやめつらん

山寺の園櫻のまぢぐん大陣のひさ  
花奉尊の世も賢ほろもがく群れまけ  
られませう

上上士回

百曲園袖巻

まよわつとそんけい糸の白へる  
梅々香まゝる袖まりのうち

難波のはとゆみは梅ぐのちりひな  
とやと袖まりの梅小目とつけのれも  
られ外ゆみはたの花盛はけうたじ

上上士回

四角園

野のゆりもあへんこころん  
そんけいりりりみ圃のちかしくん

張景郎の故もてりてひさく馬のおし  
われはけいひさのちかしくもまはく  
すのこなれと制せれもちちあさく

上上士回

笑テ品

いんかーん  
いありげな 庚申のさう

春を春申隊は梅のちちまらゆて  
かまらうと感うまの梅とまらうと

上上士回

花亭待

万葉を名うてある門口に  
あこのあはれさ妹々相子松

芳葉にわごころくわらうまらち  
外の進まねに送るもよそく

上上士回

六紀園右大琴

まゐるの父母の杖あやうとねんと  
見て人希とあやう周ち



發 毎とくしんせいの室ののびくくさくさく  
がまののびくさく

上上吉 五葉全口景亦  
名刺

「女 妻よとて京女やけりくせん  
林のくさくさくのちとくさくさく

發 衣るるに超師雄さくさく妻をさくさく

上上吉 楊柳園通る

「ここののちて入橋 ぼくのさくさく  
かしてうせぬ花のちとくさく

發 本盛ふとて大橋をさくさくのちとくさく山の手りれ  
さあさくさくさくさくさく

上上吉 花樹園苗誌  
ギフ

「秋ととれさくさくさくさくさく  
西戸とりへもさくさくさくさく

發 夜すさくさくのちとくさくさくさくさく  
執心くさくさく

上上吉 百花射梅さく

「年 玉のちさくさくさくさくさく  
鹿のちさくさくさくさくさく

發 柳子と扇と持て孝天席のいじ倍はさく

上上吉 金成樹

「柳子のさくさくさくさくさく  
不さくさくさくさくさくさく

發 古池の陸ののちとくさくさくさくさく

上上吉 溪流屈元清  
主相室

「くさくさくさくさくさくさく  
赤の刺よさくさくさくさく

發 火打をさくさくさくさくさくさくさく  
誰さくさくさく

上上吉 二見岩景  
信上田

「豆のち山吹の花のさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさく

發 小刺をさくさくさくさくさくさくさく  
さく

上上吉 花器園長人  
エトサキ

「花や娘のさくさくさくさくさく  
柳の月りさくさくさくさく

發 目と面とさくさくさくさくさくさく

このうち下の向のつげのたぐり

上上士 六石園阪持

他の向... 蛙も花にうぐやしの

上上士 呂竹繁葉赤

鹿... 上... 花の... 鹿... 上...

上上士 廿日琴一 成

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 瓢箪王上口

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 緑酒園常成

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 瓢 駒 雄

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 泉律 園

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 砂原法菘

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 甲 任

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 蘭亭花正任

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 眞是園美成

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士 一節園竹丸

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

上上士

... 鹿... 鹿... 鹿... 鹿...

「馬に敷つて出て出りてりり  
下女もさきさきとて飛ぬおど

上上士 六条楼信松丸

「うらりうらり扇のうららり  
扇のうららりよかりさきさき

上上士 信松丸 若菜 陵三亭

「お折してちちを搦のたまに  
雷多てちちをちちをちちりり

「**隠**とれも二恋にやまき三照るの  
厚るがねの白雲の若菜どのどれもく髪紫

ある姿をうらんでござるぞ

上上士 下字場 懸橋亭圓居

「月をさしひらけさきさきけりり  
先はさきさきさきさきのりり

上上士 五口亭若菜

「うらりうらりさきさきさきさき  
おの娘さきさきさきさきのりり

上上士 木履及糸松

「美るにうらり双のさきさきさき  
こいさきさきさきさきさきのりり

上上士 信松丸 笠持丸

「白酒に酔つてさきさきさきさき  
かきさきさきさきさきさきのりり

「**隠**は田舎合をす外ワハハハ  
身籠り我業はさきさきさきさき

上上士 ナコヤ 奥亭稻平品

「さきに返つてさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきのりり

上上士 能雅房實基上人

「風のよに髪うの通へりり  
おけりりおのち子のりり

上上士 極雅園祐佳

「万葉のさきさきさきさきさき  
りりりりりりりりりりりりりり

上上士 ナコヤ 誰法 師

「さきさきとさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきのりり

「**隠**同位さきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき

上上吉 阿列 六々園

「まふとあちこち」に揚き姫の  
おねりぬのねねさもーつ

〔説〕屋のさうらよらと入て早とららる  
おららるおあがう下世はてち限さ  
らせての証佐らひ言君王これようふ早  
ねとりんとたりらく転かくられ  
白氏の再来感むるにあまうあつ〔説〕  
よつて春の巻軸ふすまきと軸と合の  
あまの証佐のさうららう

▲ 婁と邠

真上吉 船の屋細入

「後拾遺をわく」てあはれ日に夕何岸の  
小あちりひひねあつこささひよ

〔説〕津の国基はて懸たのちての出先なくみに  
まえきと襷集の由たなくする西入て具を親見

幸の口あつていづてさうららる〔説〕おあつた  
わゆるがわいづかみねうらうらわらる〔説〕さう  
ららるらたてすをさうらけらつてまき入らる  
〔説〕早かろう申納き通後らて女のつらねまを  
つての出位あつてまきとあまあ

功上上吉 春 樹

「くせつさうまも其のあはかりん  
ちく一まにあつるまのくち

〔説〕本名記貫さうららるの紀の國をさうららる  
吉原入とま大あまひのいお方の女あつねて  
かうらるおまはらうらららららららららら  
のちうみとねまを世活狂言のあつらひと儂に  
附代はらうららあつるまのちあてまらららら  
お男女の中まらららららららららららららら  
ららららららららららららららららららららら

ごろぞ

### 功上上吉

大坂

### 春酒屋不美人

涼とらるゝの歌へしく竹茶机  
松うくろくまのちちうろく月

〔名題〕竹茶机其の夜納涼はるゝと其の曲歌の  
をくろくるとして竹茶机はねとびてちんとして  
さるかゝも〔名〕夏の字竹の字の秀句はちんとの  
りてまてらつともまろ竹茶机さるゝとそれ  
より梅をとれ木かゝて故懐のしなくひきじかき  
一そのまろくまゝ

ナニヤ

### 至上上吉

### 龍の屋弘番

〔軍〕さるろくろくけうくは川の  
棟をまろくろくの歌般さるゝま

〔名題〕川の幕あき夜船の甘うじとるまきとる  
く小まろく黄をまろくまろくまろくまろくまろく

れろくまろくまろく〔名〕城を木と血をいりて  
はせあうくまろくまろくまろくまろくまろく  
たの詞をかくて夜船のまろくまろくまろくまろく  
まろくまろくまろくまろく〔名〕詞まろくまろく  
く実に太平の歌の川舟あろくまろくまろく

### 上上吉

### 駄山人

〔石〕川や障の小川て駝下駄よ  
まろくまろくまろくまろくまろくまろく

〔名題〕加茂川の漆のぼける樂の歌ひかりと幕あき  
まろくまろくまろくまろく天祥の体にてまろくまろく  
まろく赤まろくまろくまろくまろくまろく赤時代世話を  
ひとろくまろくまろくまろくまろくまろくまろくまろく  
いろまろくまろくまろくまろくまろくまろくまろく

### 上上吉

### 玄翁名言赤金

ナニハ

三男の昔向山の留まより  
おとく夢をさそけそそく

〔歌〕 藤花の如の花小櫛の葉をかざるをまきや  
せいろふに花は花は月とていふ古人の涙は松柳  
あねかふるはは日天幸あふんとさすさへ  
おとく夢をさそけそそく 〔説〕 さらの俗説のまそそく  
くそひきすし 〔歌〕 張子房ぶつてく三郎ぶつて  
あそけおとくをさそけ 〔説〕 さらの俗説のまそそく

信戸舟

### 上上吉

### 千曲楼芳住

〔歌〕 藤花の如の花小櫛の葉をかざるをまきや  
せいろふに花は花は月とていふ古人の涙は松柳  
あねかふるはは日天幸あふんとさすさへ  
おとく夢をさそけそそく

〔歌〕 藤花の如の花小櫛の葉をかざるをまきや  
せいろふに花は花は月とていふ古人の涙は松柳  
あねかふるはは日天幸あふんとさすさへ  
おとく夢をさそけそそく

### 上上吉

### 壺錫唐益

〔歌〕 五月節句の暮あやみのかあつかたさるる人  
ふりゆりゆりまてそへ大中原のつぎたちと杉田の大船  
軍さあせつ蘭本持の多き舟つら首歩に白く名さの  
そとく天幸へ

〔歌〕 五月節句の暮あやみのかあつかたさるる人  
ふりゆりゆりまてそへ大中原のつぎたちと杉田の大船  
軍さあせつ蘭本持の多き舟つら首歩に白く名さの  
そとく天幸へ

### 上上吉

### 射柳園軒風

〔歌〕 藤花の如の花小櫛の葉をかざるをまきや  
せいろふに花は花は月とていふ古人の涙は松柳  
あねかふるはは日天幸あふんとさすさへ  
おとく夢をさそけそそく

〔歌〕 藤花の如の花小櫛の葉をかざるをまきや  
せいろふに花は花は月とていふ古人の涙は松柳  
あねかふるはは日天幸あふんとさすさへ  
おとく夢をさそけそそく

### 上上吉

### 年都も

〔歌〕 退りけて夢あふんりさるるの子  
けこよ色せりさるる里の子

〔歌〕 藤花の如の花小櫛の葉をかざるをまきや  
せいろふに花は花は月とていふ古人の涙は松柳  
あねかふるはは日天幸あふんとさすさへ  
おとく夢をさそけそそく

上上吉

菊兒堂坐六九

「月の輪小咽まめりうらら地し七  
精よりうららしくかりんまきく」と

「醫」轉多中月けいとちるくはは二の句  
わたりくつげられ精さすの本末よくまを  
りれらる咽うらら木まらるる言大元りめく

上上吉

二本法師

「あやうしくと三十一うららりやうまき  
八月あふさくまきる精月記

「醫」さみれのもごちて落行御の返るにあか  
のまきらるあかたつるの本敷をさふ大落であつて  
まきらく

上上吉

花風亭元味待

「風」まらちてあゆらうららとまきる君のあ  
かハあうらうらなをのまきしと

「醫」衣籠舞の夕月しあうち奴のふきまきるまきくは  
と大落を孔子流し引て何やうやうららちちや  
うららあゆらうららあゆらうららとまきる君のあま

詩

上上吉

蝶々亭仲任

「つ」のまを垣よりのくひのまき  
まふふのまきうらら良のま

「醫」惟先あてはまきうららほとあつるあまある襦の  
小娘よあゆらうららあまのまきうららとこれに  
のまき入らうららあまのまきうららまきうららまき

結核

南記

上上吉

加茂葵

「佛」わくまき草のいさあれて  
あまをさしうらら花の香

「醫」若返あままき草の枝となつてあまのまき入  
の化株いふとあつてまきうららまきうらら  
あま

上上吉

あやめ甘糸

「か」やめあつたまハまきうららとけられても  
狸森ののまきうららうららあま

「醫」あまのまきうららあまのまきうららあまのまきうららあま

書の類にかくしめりては善のちりては悪のちりては

上上吉

八深田寺

月花夕付

さう小むろろと那系橋とあつて法  
すこおあつとあつとあつとあつと

隠三子右衛門下花とさうさうさうさうさうさうさう  
まのまのりきさあちの花あまのさうさうさう

うけのりつて

上大胡

上上吉

九丹園煉康

一耳のあつとあつてさうさうに大佛て  
枚子かてせと 初あつとさう

隠大佛とさうさうにみくきと枚子とさう  
あつとあつとさうとさうさうさうさうさうさうさう

あつとあつとさうとさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

上上士

川又

上上士

浅田居

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

上上士

出雲鯉鱒人

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

隠三子右衛門下花とさうさうさうさうさうさう  
まのまのりきさあちの花あまのさうさうさう  
うけのりつて

上上士

竹女亭中吉

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

上上士

杜の屋仲貫

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

上上士

櫻東園雲丸

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

隠三子右衛門下花とさうさうさうさうさうさう  
まのまのりきさあちの花あまのさうさうさう  
うけのりつて

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

上上士

▲秋之部

本吉

カヌマ

浅来園安良



「つらり陰の枝さいーきの秋の樹の  
さくらの花の千枝を別

【佐老の夜くさく】を源氏傳に記す  
此よりよき世に於ては樂天詩傳におはる  
狂歌の程と存せられたるのまゝにすべしと  
此二首のまゝを佐老のまゝに記すべしと  
先いそむつと、源氏傳の巻に今枝を別  
かどりてつらり花をさくさくをさくさく  
彩色のさくさく山槐記の文にて記す  
を秋の神ふさくさく枝の千枝をさく  
るさく佐老のさくさく【佐老のまゝに記す  
あつらひつらりねどよのさくさくさくさく  
さくさくさくさくさく

上上吉 壺貞楼松千本

「揚子田の池のつらりのまろくさく  
かきさくさくさくさくさくさくさく

【新田新田】まろくさくさくさくさく  
杖の長さをさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
【佐老のまゝに記す】さくさくさくさく  
さくさく【佐老のまゝに記す】さくさく  
さくさく【佐老のまゝに記す】さくさく

上上吉 和氣有武

「大馬と出てさくさくさくさく  
月のかさくのさくさくさくさく

【佐老のまゝに記す】さくさくさくさく  
れさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさく  
佐老のまゝに記す【佐老のまゝに記す】  
さくさくさくさくさくさくさく  
さくさく【佐老のまゝに記す】さくさく  
さくさく【佐老のまゝに記す】さくさく  
さくさく【佐老のまゝに記す】さくさく  
さくさく【佐老のまゝに記す】さくさく

上上吉

日光

鳳鳴閣鳳鳴

てうりるかみのひるにさそれや  
ひーけてあふるまねのてうらん

鳳鳴閣の月のまことのあにたぢてや梅灯

あふみひるのてうらん月まのあふみあふ

あふみあふの杖狂まうちん年にもあふ

さそれ尾花もうらぐに成てはなはなりの

あふみのあふみのあふみのあふみのあふ

にさそく

上上吉

山形 巻巻頭

巻巻頭

カさきさきの巻の下うけい  
あふみあふみのあふみのあふ

鳳鳴閣の月のまことのあにたぢてや梅灯

あふみあふの杖狂まうちん年にもあふ

さそれ尾花もうらぐに成てはなはなりの

あふみのあふみのあふみのあふみのあふ  
にさそく

上上吉

鈍々亭

中くよかきもよあふらんちん  
まほふあふと早あらん

鳳鳴閣の月のまことのあにたぢてや梅灯

あふみあふの杖狂まうちん年にもあふ

さそれ尾花もうらぐに成てはなはなりの

あふみのあふみのあふみのあふみのあふ

にさそく

あふみあふの杖狂まうちん年にもあふ  
さそれ尾花もうらぐに成てはなはなりの  
あふみのあふみのあふみのあふみのあふ  
にさそく

上上吉

詠笑亭裏行

半切の小口ゆよりねう杖と  
まいてらんるあつこのこみちやふ

際 小口粉きね葉をふ落人のこらふえうりの  
赤かろ木のはらふるのさのさうなを  
口あふのほのぼの思ひよさされをま  
さ考向うけらるるまじく

千路堂上栄

「あふらるる者の葉よと風はと  
あふと七夕のうらみかゝるわ

際 乞巧夜のゆく花路の着のまをそよくと月澄  
をさるよふたふと二星のまをびと  
たふ感どてのせうへ結句なをなげぶらう

上上吉 梅の屋

「空の海をまつ雀小枝こまひ  
むらやある梅のたぬらう

際 望の夜のまう放まをまらう鶴の中を  
強の公とをこられたみよらう  
上上吉 千路庵砂子

「あやの身はも果のあつむら  
けさるる杖のやまのま

際 帯つてのしほく口をまらう  
むとまにかけれを杖のうら  
よくほらるる

上上吉 松樹園存人

「義士のあつか論アのあふま  
まをまついやとまをたむ

際 初冬のまをまて短冊とらう  
らるるあふのまをまのあつと  
まをまのまをまのまをまのま

上上吉 将 房

「あふらるるあふらるるあふらるる  
あふらるるあふらるるあふらるる

際 まあふらるるの幕あをまらう  
集のあふらるるあふらるるあふらるる

上上吉 瑞雲園文千卷

杖掛 ころりそそそとく ぞうりまて  
まこころわづのまろくくそあく

秋狂言にまろりたるはまろくくはのまろり  
このまろりたるはまろくく

上上吉 薫枝楼只丸

外けの八間とととととととととと  
外けのうみのかんらんらんらん

入内河のひかりしまひのけのかねととととと  
てりまるととととととととととととととととと

上上吉 丁々亭柿時

さうらふさんのかまの附あて  
血のたるさうらふさんのかまの附あて

四村九の中鈴巻の付物に鬼づこのとととと  
まろりまろりまろりまろりまろりまろり

上上吉 規矩の屋吉彦

規矩の屋吉彦の屋吉彦の屋吉彦  
規矩の屋吉彦の屋吉彦の屋吉彦

真あをひひれ妙

上上吉 紀長雄

まろりまろりまろりまろりまろりまろり  
まろりまろりまろりまろりまろりまろり

名目のかみひまろり

上上吉 柳屋亭唐輪

まろりまろりまろりまろりまろりまろり  
まろりまろりまろりまろりまろりまろり

玉田模範の存の上一つ

上上吉 八木亭満守

まろりまろりまろりまろりまろりまろり  
まろりまろりまろりまろりまろりまろり

鷹羽の蝶の玉佐る月茶のかさうりめが  
まろりまろりまろりまろりまろりまろり

上上吉 教寄版一醉

まろりまろりまろりまろりまろりまろり  
まろりまろりまろりまろりまろりまろり



書  
 初  
 筆  
 隨  
 意

醫 かつらぎのちかちかにはみごとくおぼろをきき  
らまし一糸用ひあまし

上上吉

内幸

松梅亭増安

うららかなことおぼろのれいも一羽ふ  
か敷もまてついでそゆく

醫 借金のせとをゆくとおぼろをゆくとてき理  
まひの分敷もまてはままでゆくとくはら  
ゆくとく

上上吉

虫喰文字成

ほいとあまてあまて盗く人  
梓ふも口とまはれんよらん

醫 盗人の後のはうとて方体口く先をばれ  
たるあまてゆくと

上上吉

久十

一口窓文字成

たま柿ふ法を後よめ女子の  
男にまてついでとる金のお

醫 太家妙典の功徳かつれたやと  
かじ

上上吉

久

五口窓文字成

放され小者の駒もてる月の  
おとこつてのり十五夜

醫 小者の駒引いとくおのづかのまたりと  
をゆくとあまてゆくと

上上吉

上田

長歳坊浦風

月若にみえ入てとれおぼろ  
お中にとまてる凡もこりゆくと

上上吉

サカ

化鉄香カ子

おぼろもつらうむ板生金に  
何とそいものおぼろをなつてん

醫 救生金にむつとむとまておぼろのむらひは  
結句のむらひをまてまてあまてゆくと

上上士

トキ

栴檀堂玉成

年若くお小のかくて十三夜  
まてとまてまてまての名月

上上士

トキ

栴檀堂彈

かけまわるあまうにうつくは  
ふらなけいし石山のあり

上上士

大坂 芦の屋彦

あつてふよふふんらん  
そなたけいしあまの海ひのそな

四三首示ふなごうし十三歌の石山彦彦

あつてふよふふんらん  
あつてふよふふんらん

上上士

又山 橘 薫

長短の角もろくろく秋の  
得ふろくひしをうしあま

上上士

又山 和歌姫衣

そあしあまのうら  
枝子もまける枝のいろくろ

上上士

又山 六帖園

くろそのくかよふあまの縄もろ  
ふもゆるくもけるまむ

四三首示ふなごうし十三歌の石山彦彦

上上士

又山 本名岩橋

上寺のふ奥をうら  
久ひよ口の秋のうら

上上士

又山 紀賤丸

権威のりるけん  
こはてふ月のもももそて

上上士

又山 井姓亭うた也

鈴糸の舟く  
あつてふよふふんらん

四三首示ふなごうし十三歌の石山彦彦

上上士

又山 撰本赤月

うら酒にちよ  
小菊にあま

上上士

又山 松花堂俊隆

つらぬのこの  
いなの国あ

上上士

又山 笠の空夕管

四三首示ふなごうし十三歌の石山彦彦

上上士

又山

「かゝるハ射すて女門ハ  
まろの一筆をぬいたとにたり

上上士

榊簀亭白雲

「馬ありとよとれし世をまのうん  
張のま荷にさけることしり

「**啓** 三毛のりく糸にてあそぶ一や牛相の茶の  
杞りふらちと年々佳しは外の例の口りくくと  
まかれま〜

上上吉

玉鉾道済

「妻とあふすてにまれののらうと  
下秋の止齒のもあ〜ん茶を

「**啓** 秋の山にけりて無首なるはあつち茶の  
あまどつてはあま〜んをよ〜あがるあつた下  
弦の齒入るまじき滑整るまや〜まじりつこよ  
つて秋のま軸ふま〜ん

▲冬々邪

至上上吉

千金斎春芳

「くろり喰あまもまの糸あま〜ん  
よ〜んを〜んの柏りん〜ん

「**啓** 葉喰寒秋の鶏ふるも特てのあつた〜ん  
いふてふ〜ん〜んま〜ん〜ん糸ま〜ん〜ん  
めんごりの我後中に入ら 故〜んが〜んては茶の  
効ありしとよ〜ん〜んは内**天**お〜ん〜ん〜ん

上上吉

竹林堂友任

「あ〜んまのまれの〜ん〜んあ〜ん  
あ〜ん小ま〜ん〜んま心茶の山紙

「**啓** 志を然とけ合羽の糸糸とら心〜ん小  
てあま小のま〜ん〜んをた〜ん〜ん〜ん  
ふ〜ん〜ん志をの山紙評判〜ん

上上吉

篁嘯居氣枝

「お〜ん〜んまのま〜ん〜んあ〜ん  
門の口をも〜ん〜ん大〜ん

「**啓** 顔まの二番ま〜ん〜ん門の大を扱まね



いろの雲もあましく戸の明なほひ入りの山  
吹いらのそとをさるるまてあづけいおがうほと  
ききき

上上吉

尾州

柏樹園常人

「つとむあるくかゆいおれもるふ合の  
玉子をちあるがれ小ふまぬ

「**隆** 何のつとむあくところもたりにくやふれと  
たまごのそとくち付小とてのまはあひとや  
されちを大捨の狂言とづく十かたねつと  
これよびまびまよひ大まきでござるぞ

上上吉

クハチ

五逢園舟丸

「**棧** 者にまきくそあふぬ戸にあも  
あふさ茶らるるまう字治の山里

「**隆** あくわがふ茶をうるまもあつねあさ  
げのうまきころかじらるまの各々妙様と

上上吉

ワカ

南桂子藤成

「**南** 人のまともはてふりてふりてふり  
ふりてふりてふりてふりてふり

「**隆** 物町にて吸おとまひて帝國をまごめと  
そあより諸高がふることをしる古うちせつと赤  
あぢとひあつ

美濃

上上吉

新樹園子代成

「**カ** けあれの鬼あふるよ土のうと  
赤いこころさきと羊のうら

「**隆** ちのまのまを鬼もまのむけ赤と  
あぢとひあつ

上上士

ト三女

六解園見兼

「**ゆ** のさほのうへは子も埋一ちの月  
やたつは草 山 山 山 山 山

「**隆** 禅ちのちの目もまのまを字とつとつと  
さあよくまえま

上上士

金

樹

「**つ** くのまのちと香伊あともまを川  
さくをわくむさるの日の舟

上上士

永平

成風亭春及

「**千** 舎のまるとまのりのたうとま  
かそく日とあふるのせうとま

上上士

玉柳園枝指

あれをくも不破の雲々のくもくも  
ちのくもくらの木々々々

上上士

山家赤下手

者の日に糸根の心をくもくも  
くもくもくもくもくもくもくも

四羅ひとくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも

▲亥之部

本上吉

福酒屋内成

板戸の日の魚をくもくもくもくも  
かちりつくれくもくもくもくも

慶

祥雲のくもくもくもくもくもくもくも

季更のくもくもくもくもくもくもくも  
仕り非はくもくもくもくもくもくもくも

よれれれれれれれれれれれれれれれれれれ  
袖太時の秋舞美くもくもくもくもくもくも  
けろ浄ろくもくもくもくもくもくもくも  
をくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
中くもくもくもくもくもくもくもくも

本上吉

滝水車強氣

くもくもくもくもくもくもくもくもくも

困程のくもくもくもくもくもくもくも  
待てくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくも

とていじら幕がごとくほしくさるまじきこと  
くさすもなまじきこと

至五言

苑園亭麟馬

「一」は一層の空とも接ちあは  
君うるさや天の相を

〔鑑〕瘡がくまうとあつたことさきよにあらぬ  
秋のさるるまじきかしの佛経のまじきかしの  
かしの相をあらうかかしのまじきかしの  
まじきかしのまじきかしのまじきかしの  
まじきかしのまじきかしのまじきかしの

至五言

大江千里

「ま」かくとくまじきまじきこと  
まじきことまじきこと

〔鑑〕まじきことまじきことまじきこと  
まじきことまじきことまじきこと

おのれまじきことまじきことまじきこと  
おのれまじきことまじきことまじきこと  
おのれまじきことまじきことまじきこと

至五言

緑樹園元有

「あ」のまじきことまじきこと  
あやのまじきことまじきこと

〔鑑〕まじきことまじきことまじきこと  
まじきことまじきことまじきこと  
まじきことまじきことまじきこと  
まじきことまじきことまじきこと  
まじきことまじきことまじきこと

至五言

花咲菴米守

「仲」まじきことまじきこと  
おのれまじきことまじきこと  
おのれまじきことまじきこと

初に行うてたのころ仲ざらむかひのまゝあや  
れ首年よきとらふと邪にふきる（一）昔の  
ころ國を文向なると（二）本意の傷よはれ  
あつてはる國のころた

**至上吉** 初松亭早丸

「海のころかりとていさそらん  
君うほりののぞふと」

（一）仲ざらむかひのまゝあやれとていさそらん  
のまゝあやれとていさそらん（二）君うほりののぞふと  
一本堂業を違ふとていさそらんのまゝあやれとていさそらん  
のまゝあやれとていさそらん

**至下吉** 後 ちり丸

「はれとていさそらんとていさそらん  
とていさそらんとていさそらん」

初めはつとていさそらんとていさそらん  
のまゝあやれとていさそらんとていさそらん  
高  
藤倉師直のまゝあやれとていさそらん  
者

**至上吉** 秋成数雄

「はれとていさそらんとていさそらん  
とていさそらんとていさそらん」  
中二階のまゝあやれとていさそらん  
とていさそらんとていさそらん  
血のまゝあやれとていさそらん

**至上吉** 錦沢堂百羽

「はれとていさそらんとていさそらん  
とていさそらんとていさそらん」  
仲ざらむかひのまゝあやれとていさそらん  
とのまゝあやれとていさそらん

上上吉

江都園

かゝるまじきものかといふは  
別れといふも難いささたれ

陰者の変の若くもまじきまじきまじきまじきまじき  
かゝる論語のまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
かゝる論語のまじきまじきまじきまじきまじきまじき  
あゝあゝ

上上吉

狩場早房

まじきまじきまじきまじきまじきまじき  
神のまじきまじきまじきまじきまじき

陰袖ひまをの付をよあぢくむらけ  
手うちあきた袖はまじきまじきまじきまじきまじき  
あゝあゝ

上上吉

陶亭僧馬

日と月をあまのまじきまじきまじきまじき  
あゝあゝ  
陰かあまのまじきまじきまじきまじきまじき  
あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

上上吉

月の金丸雄

あゝあゝ  
戸尾うとうまおあわいーま

陰わくかくはのまじきまじきまじきまじきまじき  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ

上上吉

江戸花成

あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ

上上吉

新樹園景守

岳亭年

紀  
豐

春  
信

蘭  
亭

花  
元

南  
亭

泥  
田  
坊

賴  
房



燭  
主

捨  
魚

万  
守

早  
苗

天  
馬

盛  
研

六  
歌  
園



評判六歌園

「志のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

「花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと  
花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

上上吉 花の辺雅楽雄

「このまことあふれぬさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

「花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと  
花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

上上吉 桜三千束

「このまことあふれぬさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

「花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと  
花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

上上吉 十帖園巻さ

「このまことあふれぬさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

「花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

上上吉 泉月巻兩眺

「このまことあふれぬさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

「花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと  
花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

上上吉 錦糸亭綾機

「このまことあふれぬさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

「花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと  
花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

上上吉 江都寺茶寮子

「このまことあふれぬさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

「花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと  
花のひあふあの花の輝くさかひあふれに  
さくさくあふれぬ花のむつこと

上上吉

ワカ山

松見

いもとつるころんくんのめやうふも  
ふ代と抱あつるのりん

下向のつるびーとま際らあけらるる  
行とてさる

ナコヤ

上上吉

平安堂七辻

うれーさひめきくねえくさつらう  
よいもと極の妹りかな

あひも中くさるはころものつねさあも  
めとてくうく

上上吉

幸喜ぬ留

鼻毛とみあみのうつらふあふ  
天よのひてもそのうけねあ

まきのいろどのひる鼻毛とあのみすい  
わうくてもそと下の摺たてま

上上吉

アハヤ

月の屋先棧

地のあくまとあかめてあふ  
湯ともあつるさ夜くの積

ていつんい

長引下秋葉

上上吉

原田稲垣

いもとワレと向をくねふ  
くもまうとくろろあ

窓をさうかふ小修うあなぞく  
通るま

山ガタ

上上吉

柳枝園長樹

うきさひつらるる妹あひ  
いとあの中にてたて

窓の向そのくはぶひそひ  
なけあ

上上士

アハヤ

三日別暮三

くさるる者にかあとい  
ませくくれねいも

上上

人万年

ことわりやあふの者にと  
まのーあつつけさあ

三音記ちがひまてと極を  
まーまの者に足跡い



上上士

上田

只竹桑音日流

妹のうらまは待の于乙の門ふ何そ  
ましくもたうきりうま各うま

上上士

櫻樹園行丸

仁和寺の法座もかくやくま女の  
つらまてねけぬ編のあこしな

上上士

後小路近及

法神のまをちよちよちよとて  
命かけたるワ小口のま

三平所の浮子公を法除のり小口を

極つりよしく

上上士

ヤフ

禁籬穴位

待ふくを板のいばらとまきけに  
まゆの埋入りやむひの火

上上士

左大尽

人にかくのちひ通しと  
ふの落るやのちをまをま

同位ありむ移る人は落るの君もに

おねりうまはしむまのりろくてこころ外

至上上吉

宝亭正直

一川さねしぬ松一そわつたま  
まてしあとも先ゆまのそ

一夜の夢のまの上りなひまど空れ

一月の縁前後はえぬま中のていつけぐま

ワロワがぬみまのあまのあて授命のいば

なひまのいばをたねとまこと口は養ひま

まよ<sup>〓</sup>なまのあまのぬれぬくせまかたをま

まてくともあまのいばれ奇特の妙なる善護の

まてくともあまのいばれ

▲ 雑之部

大上上吉

至清堂拾真

「花のや月の多あやちまらん  
まことめぬ旅のよしのあえこぞ

四六歌あまの黒子の様まよふ番目に花籠小被  
布の生立ちけりよし時々のやまがうの花に公と  
うろ古金赤まどう出て白雲あつとけりやふはし  
けを具かへまらそとまきよてこのうきこふ中より月  
をまづ精陰のそ氣えくをまらると古花と引  
てのつゝ終よりごころとあまのこひのこゝろに  
あつとさだめのまま水のまらると時中とま中何合  
と引て花味の姿あつとまま珠撈とと大生ま  
中かへらぬ上事の仕お感ふく

大上上吉 六歌園文敷

一本房の彈をりまきぬのち月ふも  
いんりり坂のりつとまらるる

四六歌旅人のまきけりうま峠にそまのうとまて中

此の波のまきけりうま峠にそまのうとまて中  
はの誰か雨とまらるるまつらうのまらるる  
四六歌朝のつ折目とまらるる功者のまらるる  
折也かねとまらるるまらるる

大上上吉 素雅園天馬

かくや娘とまらるる跡よ今まらるる  
まらるる様まらるるまらるるの歌

四六歌親仁のまらるるかくや娘とまらるるの秋歌よあ  
ねと天人にまらるるまらるる空まらるるまらるる  
まらるる落るる様まらるる隨市村まらるるのひやう一六  
でけとまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる  
材でもまらるる類まらるる様まらるるのちまらるるまらるる  
まらるる四六山まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるる

至至上吉 司馬園天馬



くちりの大と命の大神にまゝふりしつゝ  
定むるものすう夫れちかき人のこと  
うらむいふもさう上りのまゝいふは  
あのはれをわきまへ

上上吉

京市

千枝花え

「田圃ハ七ノ下代をさきとて  
うらむいふ酒と化しける」

「**院**會社のまのまゝあつる着せうて酒と  
なり赤まきあつるとさうさうさう二年侯の  
文を引てのすう田圃の早せうまゝあつるれが  
まゝさうさうあつてさきと化しける」

上上吉

南亭月住

「下戸とみん香さう除てん食あつて  
うらむいふのまゝさうんや湯

「**院**道楽寺の形化あつると酒とのと酔ふる

あつちの酒のいふことと酔ふる  
うらむいふのまゝさうんや湯  
まゝさうさうあつてさきと化しける  
まゝさうさうあつてさきと化しける

上上吉

岳亭春信

「うらむいふの酒のいふことと酔ふる  
まゝさうさうあつてさきと化しける

「**院**たのせの高尾中の中の人文字とて漢の  
本筆まが事と引く傾の字とて趣まてさう赤  
赤帯下のねさうのまゝさう二階の赤まてさうに  
一の五全筆まがさうのひまての月の歌をせ  
千金く」

上上吉

サカヒ

酒畑主

「寝るたうかくけーから入るも  
富士の裾とひあつま街と

山部赤人佐田子のくれたてはたてあはる  
とてくろひのまはる香もあまきと感一のあま  
と

表のひねりかげりひねりかぎの  
妙造くるひの西の早がらうまの好小敷の東  
御道大切や娘の名が狂まらうとらげりて

上上吉 長 古家両吉

かゝるやして耳をあけねと極めら  
くちのこえらるるまのトク不

思まらびのあまのまが柱のまきにて  
あはけりねあまのまが柱のまきにて  
月まがのひ歌小口たかくまきとて本ら  
けまきとてまきとてまきとてまきとて

上上吉 三 藤岡

あゝの巴蜀のいふふ本者の  
文日のやせらるるまのうけり

本曾のまきとてあまのまが柱のまきにて  
夕日けのあまのまが柱のまきにて  
つねにまきとてまきとてまきとてまきとて  
ま

上上吉 オク 千柳亭唐名

録つきの法作とてあまのまが柱のまきにて  
あゝのまきとてまきとてまきとてまきとて

表のひねりかげりひねりかぎの  
妙造くるひの西の早がらうまの好小敷の東  
御道大切や娘の名が狂まらうとらげりて

上上吉 寶市亭外成

あゝそのまの中よひとらやあまのま  
まとらとらとらとらとらとらとらとらとら

石天将のまきとてあまのまが柱のまきにて  
あゝのまきとてまきとてまきとてまきとて  
あゝのまきとてまきとてまきとてまきとて

上上吉 吳竹まろ

のこあうー二日碎ちて君う代の  
あうくうたぬめらあまのあうくうた  
[歌] 五車清ゆて沈研のての天平春をのうひも  
よしく狐けんのてうほうにちかき目とききて  
はまをて大出まを君子の徳の凡よの金草  
原にうてあまよあげぬ取たりううごころこ

上上吉 花月房春林

上毛  
「ちあれて名桐乃に年とへー  
天女も油とまわりのあうりり

[歌] 本堂建まの所化のまうちまう根よりうらぶ  
こついとねぞろくがらあうーあて桐乃う天女  
まそりーのほふたうあまのいん文字まうま  
まうまうまうまうまうまうまうまうまうま

上上吉 石お仙草桃人

「大巻をぬらうのちもせせはま  
まうまうまうまうまうまうまうまうま

[歌] 順途院ゆて命と持ての出ねぞろい後まよー  
山とまよてあ人のまふいこ内材本に目とけて  
ねのまうまうまうまうまうまうまうま  
あままうま

上上吉 芙蓉亭英

上毛 香好堂改  
「あうのまうハねよまうせてあまの  
あまのたのまうやけテのつり人

[歌] 頂三宿の漢跡こそ二弦の琴とまうて松凡の  
琴にあま後には納まら平とまのううあまを  
「ほとたういあうちかんまう

上上吉 六枝園蓮樹

山カ々  
「あうくくとせハ合もまうひかう  
拾ちりのうーの山ミマ

[歌] てんてい富貴うまやのあに群こまう  
ひけらあうちまうまうまうまうまうま  
よしく

上上吉

アハ

三柱亭一箇

モネとつづく歳あそびのしも  
ちのよきいひのよきめとらるん

関八幡奉りて機あそびの女のあはれに驚のあ  
らうとては成と長をまう句にさうりて百者の  
たやあつこのせうの感で全一とあつらん

上上吉

サカヒ

三輪全口歌丸

三輪とりくはかろし縁とや枚美の  
枚よかされるまやんのいと

関八幡奉りて機あそびの女のあはれに驚のあ  
らうとては成と長をまう句にさうりて百者の  
たやあつこのせうの感で全一とあつらん

上上吉

アハ

一曲亭歌雄

業にさうり三味線のもろたはまて  
引きてあつらんおのり禪

関八幡奉りて機あそびの女のあはれに驚のあ  
らうとては成と長をまう句にさうりて百者の  
たやあつこのせうの感で全一とあつらん

のまるをういといくとらへてけりまうとたお  
ちく

上上吉

アハ

弓ね全羽雀

地のロとのうれ 福岡娘百合と  
又柳子ロの角にいけみえ

関八幡奉りて機あそびの女のあはれに驚のあ  
らうとては成と長をまう句にさうりて百者の  
たやあつこのせうの感で全一とあつらん

上上吉

ウツノミヤ

女志半の雀

月のすけにこれも三ッロツとあつらん  
ちのよきいひのよきめとらるん

関八幡奉りて機あそびの女のあはれに驚のあ  
らうとては成と長をまう句にさうりて百者の  
たやあつこのせうの感で全一とあつらん

上上吉

尾列

橋立園

牛の卵くさるハ美山のあそびと  
そらりけりて作く又う代

〔説〕某先生講談の体書の武成れ後とて、  
の太平とあふるふたをせし

上上吉

下江草堂名

うすや崎のぼりちあれいさあかん  
ちうく人自らさそちやうくをらん

〔説〕禪場の昔希ぼろとの教のえそあうん

上上吉

青白菴赤住

君う代ハ子とせのつれは吸お  
さうくにうそりのちをこそ目出交

〔説〕りうくのあい椀のまひのちとせの結に  
めづけそまもまぞせし

上上吉

桃太楼有時

伏出者一山に列れの後本  
二三里送るミひのね風

〔説〕がく谷差に官本とて別といひ送るを  
いそれ三重のを大工の

上上吉

ト幸  
鯉の屋竹成

かみちうもそほてうらやうらならん  
めうく火のちるすうか指ま

〔説〕てうやうのあざをかきまの下のあ  
りのにうたうのえあ糸のちとせの結に

上上吉

ナニハ  
塙川ち成

えのこまうとてまうてわらうつな  
うり人まうにあ甘ぬちうう

上上吉

山カタ  
糸七樹

てうやうのさのさかたとまけやん  
かうににあるたま川のち

上上吉

志清亭麻斗丸

は立上とくりりてとあれ上下の  
そのあさもよいまあかの商人

〔説〕三を二に評ままかうてあま川を商人の  
とみ評とあうくぶら

上上吉

合のち在角



うーとちのりまて臨川とそ能合作  
代のそよとそよを夏つる

上上士 臨江亭里雄

象よりもちあつなくときの終に  
ころろとくるくく人いありたり

上上士 柳葉告書母書

つなちの書なから孫をつくま女の  
おもきううへううへとかつこきて

上上士 六喻園秀頼

ま女のそよ苦勞より  
上州

上上士 柿樹園魁

むくもかとうく樹さうのこま

上上士 老松軒三郎

多士スうく候とまうろほやうて  
く人一日臨てううやうう原

上上士 其常舎安丸

天う代はね一とあまをさちうて  
むーに喰せてあまう共相

あつよし  
サカイ

上上士 風翔亭本女

ハきたんえまのあも大中ろ  
多いの月記さへハまかまてう

上上士 菊酒園志保

え出して昔とてううとあまう  
こーのあう母のち能

上上士 橋樹園早苗

古雛を苦しむ位はうさうとそ外はり能

上上士 其常舎安丸

秋風とまうくうくあうのまて  
小判の桐のそふをいちうさま

上上士 柳葉告書母書

つなちの書なから孫をつくま女の  
おもきううへううへとかつこきて

上上士 六喻園秀頼

ま女のそよ苦勞より  
上州

上上士 柿樹園魁

むくもかとうく樹さうのこま

〔改〕仲町のつげはえ鏡公のあがき屋風  
きうぢりりゑ本名は源吉香の名のりて三千  
廿の眼赤につくのせうふり下切しのつとちて  
十二圓孫よなつれ何と名をのまぬた織る  
生を死のむむひのかさまをた橋橋とて人の  
不〔改〕まきりまきりふあちのせは橋く

至正吉 白毛舎万吉

〔改〕のきまきりぬ客のうり世と  
齊下とんひのちりまきせてん

〔改〕妙造河かのあて他はゆまのきうめと  
あがき我すいり男の布下とまひあきまて  
あきつくとておちり油とあにまきせて本  
よちとてまよりのき書のにちあきんとつら  
よせて竹つこの油あがきあきあきけとてす  
すていりてまよりのあきまきヨウ

惣巻軸

極上吉 泥田坊太記

〔軍〕のいあられね性母貝くの  
年一ふもかせんよまきりておつ

〔改〕け所四季表雑の惣巻軸でまきり天  
を争く評判をせきたのく〔改〕武士の浪人の  
とくしん深あまき羽とく大小はてなのだ  
蛙のあきとて西わふまけぬまきりあき  
はかたづあきとてたがひひのあんとてあ  
まきりまきりあきのまきり三井まきりあき  
〔改〕蛙とびちりあきまきりあきあきあき情  
より古今集あきあきあきあきあきあき情  
てあきあきあきあきあきあきあきあき

〔〇〕撰集の才一番目にさげ名の毛老天浩の  
 大將軍まで文武かやく相方の名位かきんげん  
 文字の秀句かきんげんまのりのがま〔天〕の  
 かりにもえそとあがりねんねんはく狂詠の  
 とぞろゝぬ〔天〕まろゝるはれとひまのまねま  
 しをめでとろろひまをう〔天〕からなりハ  
 あろかちのつちろれとろろとれか茶草の  
 代ぞろとよときたい平の法代をくしき



二行

